

安井 曾太郎

1888(明治21)–1955(昭

ターブルの上

安井曾太郎は梅原龍三郎とならび、大正から昭和にかけてわが国の洋画壇をリードし続けた画家です。ことに肖像画の名手として知られ、《金蓉》《玉蟲先生像》などの作品はよく知られています。安井は19歳の時ヨーロッパに渡り、美術学校でミレーやセザンヌらの作品を研究します。7年後帰国した彼はその成果を第2回二科展で発表しますが、当時の人々が図版でしか知らなかった巨匠たちの作品を巧みに消化した作品群は、美術界に大きな衝撃を与えました。果物とテーブルクロスによる緊密な画面構成と色彩のコントラストが印象的なこの作品も滞欧作のひとつで、セザンヌを吸収しつつ自己の表現を模索しようとする意欲が窺えます。